

## P2-031

### 小児科外来での小児慢性疾患患者への成人移行期支援への取り組み

高梨 都、油村 友香、久保村 仁美、小柳 翔、  
岡本 佑介、岩田 千尋、富田 恵子

鳥取大学医学部附属病院 小児総合病棟

#### 【はじめに】

当院小児科外来（以下、当科）では、2014年より、小児慢性疾患をもつ10-18歳までの患者・家族を対象に、小児科から成人診療科への移行を目標に成人移行期支援を行っている。以前は疾患の発症・再燃や、自己管理指導目的で入院した患者に対して初回面談を実施し、退院後は外来受診時に面談を実施していたが、外来受診患者の計測や採血を実施しながらの面談であったため、予約患者数が多い日は面談が実施できない場合があった。また、介入している患者で実際に成人診療科へ移行した患者がいないため、スムーズに移行するためには実際にどのようなタイミングでどのような支援が必要であるかが明確になっていない状態であった。成人移行期支援が必要な患者と家族に対して確実に面談を実施し、成人診療科へ安心して移行できるように支援していくため、移行期支援看護外来の立ち上げについて検討を行い、2017年7月移行期支援看護外来（以下、移行期外来）を設置することができたため、当科での取り組みについて報告する。

#### 【取り組み内容】

面談で使用する情報共有シート、成人移行目標シート、成人移行チェックリストを作成した。成人移行チェックリストはこれまで疾患別しかなかったため、各疾患で小学生・中学生・高校生・高校卒業前の4パターンに変更し、各段階に必要な習得項目を載せることで指導内容が明確になった。また、カルテ記載用のテンプレートも作成した。特に高校卒業前の面談を行うことで、就職や進学にあたり、成人診療科への移行をするために必要な患者の準備、看護師の介入方法が見えてきた。

#### 【考察】

移行期外来開設前は、患者が理解できていること、できていないことを把握し、理解できていないことを補うための介入を行っていたため患者は、実施できていないことを看護師に表出しにくい状況になっていた。また、発達段階に合わせた目標達成のための介入方法ではなく、医療者側が求める目標に対しての指導が中心となっていた。移行期外来設置後は、確実に面談することができ、患者や家族の生活スタイルや置かれている状況について、十分な情報収集を行うことができ、各患者に適した目標達成方法や関わり方を検討できるようになった。今後は、成人診療科への移行件数を増やし、事例を振り返りながら、関わり方やコミュニケーション方法を学び、更なる看護の質向上につなげていく必要があると考えた。

## P2-032

### 幼児への採血・点滴実施時のプレパレーションに対する認識および小児看護に対するストレス—小児病棟と混合病棟の比較—

林田 リカ

長崎県立大学シーボルト校看護栄養学部 看護学科

#### 【目的】

現在、日本では出生率の低下によって少子化が進み、それに比例して地方では小児病棟の縮小や混合病棟化が起きている。このことから、小児単科病棟と小児と成人の混合病棟で、看護師の幼児への処置時の援助状況とプレパレーションの認識に差異があると予想される。本研究では、一般的処置で痛みを伴う採血と点滴に焦点を当て、看護師の幼児へのプレパレーションに対する認識や小児看護に対する職務ストレスを調査し、小児病棟と混合病棟を比較することにより、具体的なプレパレーション普及のための課題を検討することを目的とした。

#### 【研究方法】

N県の小児単科病棟（以下、小児病棟）を有するA・B病院と、小児と成人の混合病棟（以下、混合病棟）を有するC病院で小児医療に従事している看護師85名を対象とした。調査期間は2016年9～10月。調査方法は、各病院の看護部長と看護師長を通して病棟に配布・回答してもらうよう依頼し、留め置き法にて実施した。倫理的配慮として回答は無記名自記式とし、研究の目的、方法、調査への参加は自由意思であり、回答や内容によって不利益を被らないこと、データは研究以外には使用せず研究終了後には処分することなどを書面にて説明した。

#### 【結果および考察】

対象者の小児看護年数を病棟で比較すると、小児病棟では3年未満29.6%、3年から6年未満25.9%、6年以上40.8%であり、混合病棟では3年未満65.2%、3年から6年未満26.1%、6年以上8.7%であった。プレパレーションの認識のある割合では小児病棟74.1%、混合病棟69.6%であり、実施状況では小児病棟57.7%、混合病棟22.2%であり小児病棟の方が実施する割合が高かった（ $p=0.030$ ）。方法として「パンフレット」が68.4%で多く、次いで「人形」42.1%、「医療機器」31.6%などであった。ストレス総得点では、小児病棟230.4点、混合病棟164.6点であり、小児病棟の方が高かった（ $p<0.05$ ）。下位尺度において「難しい対象への関わりに関するストレス」は小児病棟7.9点、混合病棟3.0点、「看護者間の人間関係に関するストレス」は小児病棟6.0点、混合病棟1.8点、「子どもに適した設備・備品に関するストレス」は小児病棟8.6点、混合病棟5.1点であり、それぞれ小児病棟の方が高かった（ $p<0.05$ ）。スタッフ間で信頼・協力できる関係を築くことでストレス減少や業務遂行が容易になり、効果的なプレパレーション実施につながると考える。